

P2-103 消化管由来転移性卵巣癌との鑑別が困難であった若年進行粘液性卵巣癌の一例

市立堺病院

原 知史, 兪 史夏, 磯部 晶, 宮西加寿也, 朴 康誠, 山本敏也

症例は、21歳、未婚。下腹部膨満感を主訴に平成16年6月当科初診。触診上、腹腔内を占拠する成人頭大の結節状腫瘍を触知した。MRIにて径20cm大の内部不均一、分葉状で、顆粒状に造影される腹部腫瘍を認め卵巣腫瘍が疑われた。CTでは、更に左上腹部に径5cm大の腫瘍を認め、卵巣原発腫瘍の腸間膜播種もしくは消化管腫瘍の卵巣転移が疑われた。上腹部消化管内視鏡では異常認めず。7月28日、開腹術施行。径20cmの腫瘍は左卵巣腫瘍由来であり、右卵巣も径5cm腫大していた。ダグラス窩腹膜には播種による肥厚を認め、大網にも多数の播種性結節を認めた。トライツ靱帯近くの小腸間膜には、径5cmの結節を認めた。両側付属器摘出術、大網切除術、空腸部分切除術、左半結腸切除術を施行するも、ダグラス窩に最大径2cmの病巣が残存した。術後病理組織診断はmucinous adenocarcinoma G2、免疫染色を施行した結果はcytokeratin7(-)、cytokeratin20(+)であったが、臨床的に卵巣癌stage IIIcと判断した。術後パクリタキセル及びカルボプラチンによる化学療法を施行するも、肝転移出現しPDとなったため、イリノテカン及びドセタキセルによるsecond line化学療法に変更したが効果なく、術後1年で原癌死に至った。転移性卵巣癌との鑑別について文献的考察を加え報告する。

P2-104 術前評価にて正常大卵巣癌症候群を疑った5症例

広島市立安佐市民病院

小出千絵, 谷本博利, 佐野祥子, 藤東猶也, 永井宣隆, 三田尾賢

正常大卵巣癌症候群(normal sized ovary cancer syndrome)は1989年にFeuerらによって提唱された疾患概念で、腹腔内に無数のびまん性転移病巣が存在する癌性腹膜炎の状態、かつ卵巣は肉眼的に正常か、異常がある場合にも外表が細顆粒状という程度の軽微なものであると定義される。本症候群は術前の画像所見や試験開腹時の肉眼所見により判定され、その本体は複数の疾患が呈する一定の臨床所見に合致する疾患群であるとされる。これまでの報告から中皮腫、性腺外ミュラー管腫瘍、転移性腫瘍などが構成疾患として判明しており、原発性卵巣癌も本症候群の一部と考えられている。今回我々は大量の腹水貯留にて発症し、CT・MRIの画像上、腹膜播種病巣を認め癌性腹膜炎の状態を呈しているもののうち、卵巣の明瞭な腫大はみられず、その他の臓器についても原発病巣は発見できないことから、正常大卵巣癌症候群を疑った5症例を経験したので、その臨床像についての検討を加え報告する。5例中1例については発症より1ヶ月で死に至り、剖検所見より微小な腫瘍が脾臓に発見され、その部位が原発と診断した。他の4例は開腹時の肉眼所見でも明らかな原発病巣は認められず、このうち1例については摘出した卵巣の病理学的所見から卵巣原発と診断した。生存する4例についてはパクリタキセルとカルボプラチンを用いた抗癌化学療法(TJ療法)が奏効し腫瘍の縮小を認め、現在も治療を続行中である。尚、診療や摘出標本の取り扱いなどはすべてインフォームドコンセントの上で行った。

P2-105 虹彩転移を来した進行卵巣癌の1例

日本大

中澤禎子, 村瀬隆之, 高田眞一, 山本樹生

肺門・縦隔リンパ節腫大を契機に発見され、虹彩に転移した稀な1例を経験したので報告する。症例は45歳1回経妊1回経産。既往歴・家族歴に特記なし。咳嗽を主訴に内科受診、肺門・縦隔リンパ節腫大を指摘された。気管支鏡下TBAC施行するも診断に至らず、PETにて骨盤内腫瘍を認め当科に紹介された。腫瘍マーカー；CA125 1657U/ml, CA19-9 24.1U/ml, CEA 0.5ng/ml。MRI上約18cmの充実性部分を伴う嚢胞性腫瘍を認め、卵巣癌を疑い入院した。同時期より全身のリンパ節(右頸部、右鎖骨上、左腋窩、鼠径部)腫大も認めた。全身精査後、単純子宮全摘術、両側付属器切除術、虫垂切除、大網部分切除術を施行した。肝実質、ダグラス窩や膀胱子宮窩に播種病変と、傍大動脈リンパ節腫大を認めた。病理組織はSerous adenocarcinoma of both ovaries, with metastasis to uterus, omentum and lymph nodesであり、pT3b pN1 M1と診断した。また入院前より眼痛、視野障害を訴えており入院後精査を施行、眼科にて虹彩・毛様体炎の診断で点眼薬処方されるも軽快せず、眼窩MRIでは右眼球上前方にレンズ状に内側に突出する15mmほどのenhanced lesionを認め、卵巣癌の虹彩転移と診断した。術後TJを行ったが、2クルールの時点でCA125の低下、全身リンパ節、虹彩腫瘍の縮小を認めた。卵巣癌の遠隔転移は肝及び肺に多いが、虹彩転移を認めたという報告は見当たらない。